

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第988号 平成27年8月27日

センス・オブ・ワンダー（2）

カーソン氏は、「子どもたちの世界は、いつも生き生きとして新鮮で美しく、驚きと感動に満ちあふれています。残念なことに、私たちの多くは大人になるまえに、澄み切った洞察力や、美しいもの、畏敬すべきものへの直感力をにぶらせ、あるときはまったく失ってしまいます。もしもわたしが、すべての子どもの成長を見守る善良な妖精に話しかける力をもっているとしたら、世界中の子どもに、生涯消えることのない『センス・オブ・ワンダー＝神秘さや不思議さに目を見はる感性』を授けて欲しい」と頼むだろうと述べています。

多田氏（国立環境研究所主任研究員）は、「センス・オブ・ワンダー」という本の中には、

「子どもに生まれつき備わっている『センス・オブ・ワンダー』をいつも新鮮に保ち続けるためには、少なくとも一人、大人がそばにいて、自然についての発見や感動を一緒に分かち合う事が重要」という子どもを持つ親に対するメッセージと、

「地球の美しさや神秘を感じとる事の意義と必要性」という我々全ての人々に対するメッセージ

の2つのメッセージが込められていると指摘しています。

特にカーソン氏は、子を持つ親に対して、自分が自然の事について何も知らず、子どもに教える事等出来ないと嘆く必要はないと述べています。何故なら、「知る」事は「感じる」事の半分も重要ではないからだとしています。

カーソン氏は、「子ども達がであう事実の一つ一つが、やがて知識や知恵を生み出す種だとしたら、さまざまな情緒や豊かな感受性は、この種子を育む肥沃な土壌であり、幼い子ども時代は、この土地を耕す時だ」と述べると共に、「子どもが知りたがるような道を切り開いてやる」事が親としてどんなに大切であるかわからないと述べています（同氏著「センス・オブ・ワンダー」から）。

しかも、カーソン氏は、親として「子どもが知りたがるような道を切り開いてやる」事は、特別に難しい事ではないとも述べています。カーソン氏は、子どもと一緒に空を見あげたり、子どもと一緒に風の音を聞くというような事を例に上げていますが、そうした事も含めれば、子どもにしてやれる事は、本当に沢山あると思います。そう考えて私の胸は少し痛みます。

素直な驚きは、感性が呼び起こすものだといって良いでしょう。その感性は、多くの場合成長するに従い錆び付いて行き、やがて新たな「気づき」は起こらなくなります。「気づき」がなければ、「観る」という働きも起こらなくなるでしょう。何故なら、「観る」という行為は精神を集中して心で観るという事ですから、「気づき」がない限り、そのような積極的な行為は取りようも有りません。

また、多田氏はその著「センス・オブ・ワンダーへのまなざし」の中で、「観る」という働きは、自然性や社会性を「目ざめ」させ、それはまた、自らを見つめる意識をも生み出す事につながると指摘すると共に、「気づき」から「観性」による「自然性」や「社会性」の「目ざめ」、これら一連のつながりは、「センス・オブ・ワンダー」という感性が出発点になると考えて良いと述べています。

驚きの感情も、悲しみや喜びの感情も、その発芽は感性にあるとすれば、私達は、子ども達の感性を如何に豊かなものにして行くか、責任は誠に重大です。

(塾頭 吉田洋一)